

# 「いわんや悪人をや」

藤元正樹師述

先月、九州へ三度足を運びました時ですが、一番最後に鹿児島県の串木野という所へ汽車で行きました。だいたい飛行機が嫌でして、それはあんな鉄板が空を飛ぶなんて、おおよそ理屈に合わないでしょう。空の上で、飛行機が、なんで私はこんな所を飛んでいるんだらうと考えたとしたら、落ちやせんかと気になるんです。

そこで汽車にしたんですが、姫路から新幹線で博多まで行き、それから鹿児島本線で西鹿児島の手前まで行くのですから、汽車に乗ってる間が、七時間ほどかかるんですね。すると、足が悪いものですから、いったん汽車にすわりますと、立ちあがるのがおっくうになるんです。その上、ずっとじっとしているもんですから、たいがい腰をやられるんです。

案の上、今朝からいよいよ腰がやられました。そういう状態でありますので、今日のテーマの内容が、体系づけた話として、ちゃんと話せるかどうか自信がないんです。

ところで、この歎異抄の「いわんや悪人をや」という言葉は、御承知のように、その前「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」と、こうあるのですから、善人すら往生

するのに、どうして悪人が往生しないという事があるのか、とこういう言い方です。ですから、この言葉のもとにあるのは、仏教では善人とか悪人とかをどのように考えているのかいうことです。

だいたい、「悪人ですら往生をとぐというのに、善人が往生をとげない」ということはありえない」と言ったのは、法然上人なんです。善人が往生をとげるといふのは、良い事をすれば往生をとげられるというのが普通です。それに対し、良い事をしてでも往生をとげられないのだから、悪い事をした人が往生をとげられないという事はありえないというのが親鸞聖人のお言葉でしょう。「いかにいわんや悪人をやと。」

ところが、法然上人は、悪人すら往生をとぐ、いかにいわんや善人をやと。では、一体どれが善人で、どれが悪人かと。善人は良い事をした人、悪人は悪い事をした人。

その悪い事をしたら、誰でも地獄へ落ちると聞かされてきたけれども、親鸞聖人は、善とか悪とか全く知らんと言っているんです。「善悪、総じて以て存知せざるなり」と。知らんという言葉



は面倒ですね。私等が知らんと言ったら、文字通り知らんのですけれども、親鸞聖人が知らんと言っているには、意味があるのです。ただ知らんという事ではないんです。知らんということに値うちがあるんです。

だから、ややこしいのですが、とりあえず、仏教で善とか悪とかいふのはどういうことなのかということをお聞きの方には聞いてもらっておかなければ、この言葉の本当の意味はわかりません。

例えば、あなたの方が、自分で良い事、悪い事ってどんなことだろうと考えてみて下さい。そうすると、良い事と思っただけの事が、必しも良い事にはならんでしまう。善とか悪、これは仏教では一つの心法、心の法なんです。わかりやすいいえば、人間の経験、人間というものはただあるものとは違っています。石ころみたいなあるのとは違っています。

人間というものは生きています。皆、此の頃生きていますという事を忘れていて、生きている事はただある事と違っています。いるという事と違っています。日を暮らしているという事と違っています。

生活の活という字は地獄しかないんです。人間が死んだら、一番最初にいくのが等活地獄。どういう所かという鬼が出てきて、首を切るんです。それで人間死んでしまったら楽ですけどね。

若い人にはわからないでしょうが、年をと

って下半身がしびれてきますと、生きているのが面倒臭くなってくるんです。此の頃は長生きするといふ事はいい事だといつていますが、あれは長生きした事のない人が言うんです。

長生きしたら、幸せだと思つています。けれど、本当はポツポツいきたいでしょう。お迎えが来ないかなあと思つていられるでしょう。若い人は長生きする事はいい事だと思つていられるけれど、それは元氣だからで、自分で自由にできんようになったら、早く浄土へ行きたくなるもんです。

それを長生きしている事がいいように思つてつていられるだけで、長生きしなはれ、しなはれいつていられるんです。それは、長生きした事のつらさ、悲しみがわからん者が言つていられるだけです。

ところで、地獄へ行きますと、いきなり鬼が出てきて、背中をさかれ死んでしまうんです。そしてその時、鬼が鉄棒で大地をたたき、カツ（活）とわめくんです。そのカツです。そうすると、一変に元氣になるのです。元へもどるんです。しかし、またやられるんです。命がもとにもどつたり、いつてしまつたり、ここを等活地獄といふんです。だから、「活」は地獄にしかないんです。

お経には、「生」といふ字が書いてある。生きるという事は、死ぬという事の反面なんです。生きるものは必ず死ぬんです。

ところが、死ぬ事を忘れるようにしていでしよう。此の頃は。そして、いよいよ死に際になつてから、病院でどうしたら楽に死ぬるかといふ事を考え出す。病院で死にそうになつた者に楽も苦しみもないんです。手遅れです。それだつたら安楽死させてやつた方が、よっぽどましです。

そんな時になつてからホスピスやなんや言うてるのがよくわからん。

本当は、生きていふ事自体が死につつある。一日一日死につつある。だから、生きていふといふ事を忘れたら駄目なんです。これを忘れるようにする事が人間の幸せと思つていられるけれども、そうじゃないですよ。生きていふといふ事は、ただ石ころみたいに日暮らしている事じゃないんです。

生きていふといふ事は、同時に何かしている事でしょう。何かしている事、別の言葉で言えば、行為といふ事です。生きていふ事自体が、何らかの行為、何かをしている事と同じ事です。

生きていふ事自体、例えば寝ていても生きていふんです。寝ているのと死んでいるのと違ふでしょう。眠つていふ事自体は、一つの行為なんです。寝るといふ事をしていふ。死んでいふ事と違ふんです。だから、人間が生きていふといふ事は常に何かをしていふといふ事と同じ事なんです。

ところで、何かをしていふといふ事において、いい事をするか、悪い事をするか、それ

にもう一つ、無記といふ事があります。仏教では、人間の行為、人間の経験の性格を、善・悪・無記といふんです。三つの価値、値うち、人間が生きていふといふ事は、何かを考えながら生きていふんです。何も感じないようになつたら、死んでいふといふ事です。

私の足も、ここから下は死んでいふんです。感じないから、歩いていふ事もわからん。だから、何も感じないといふ事は死んでいふのと同じ事です。生きていふといふ事は、必ず、何かの価値をもつて存在しているといふ事なんです。

なんぼ年をとつても、何もできないようになつても、生きていふといふ事は、その値うちをもつていふといふ事なんです。

何にも役に立たないように思つていられるけれども、役に立たないと思つていられるのが人間の考え方、例えば、仏さまの蓮台は青蓮華でしよう。

これは蓮華ですけれど花とはちがうんです。青い花なんてありません。

この前、別府へ行つたんです。二十年前とは大分違つていました。そこに海地獄といふのがあります。その池に、印度の水連がたくさんうわつていました。赤とか、黄とか、紫とか、実にきれいでした。青い蓮華はありませんでした。青い蓮華とは何をいつていふかといふと、葉っぱなんです。蓮華の葉、それで蓮台といふけれど、又は、百葉華といふんです。